

the salamander in
the circle

第三十三章

9かける3番目の王国

外伝

峯村 明

Salamander in the circle

第三十三章の登場人物

イリチャ	……	火精霊。ヒューダーが名付けた
スクナ	……	世界の果ての島の王に仕える者
コタエ	……	スクナの妹・島の王の妻のひとり
ミツハ	……	水精霊・メッサナの生みの親
『彼』	……	9かける3番目の王国の王にして冥界の王

これまでの主な登場人物

所属	名前	役職	所属	名前	役職
ネウトラ評議会	ハイヤーン	本部科学者のリーダー	世界の果ての島	ホシナ	ホシナ族の族長 マミヤの父
	ティコ	科学者		オマキ	ホシナの妻
	ナシル	本部・事務職員		キト・コマ	ホシナ族の男たち
	ヤスウ	学術調査団の団員		ゴン	ホシナ族の男 (ヤサカオ族出身)
	ダーヴェ	学術調査団の団長		サノヒコ	王に仕える役人
	ヒューダー	学術調査団の団員		フツヌシ	王に仕える者 将軍
エウメロス王国	レル・ヴァリス	王室付近衛隊長	ヤサカオ	ヤサカオ族の族長	
	ヴァリス将軍	レルの父	チドリ	アマセオの妻	
	カール	王子 ヘルガの弟	ハマツ	チドリの養父	
	ロウナス	国務省の高官	タマシギ	ハマツの養子	
	アンテロ	レルの副官	オモイカネ	世界の果ての島の王に仕える者	
	撰政	亡国王の弟	アマノカガセオ	シトリ族を去った兄弟	
ケストル王国	ヘルガ	王女	マミヤ	ホシナ族の娘	
	パウル	国王			
	ウルリク	第三王子			
	ヘンリク	ウルリクの息子			
	ホベオク	ケストル人の美女			
	ソルド	闘技場の警備隊長	メッサナ市	バンテオラ	メッサナ市の総督
黄金門市	皇帝	皇帝		メルノ	音楽家
	バイスロイ	皇帝の息子		バルダリス	メッサナ総督家の一人 臨時総督代理
	パソネル	バイスロイの参謀		メンドルブ	メッサナ化学者団の代表
アンベレオ				バラム&バランケ	双子のジャガー バンテオラの部下
	ソラン	祭祀長	冥界	冥界王	冥界の王
	レガリオ	アンベレオ王国の王		ベネトナシュ	死神
				テクトリ	最下層ミクトランの主
				プラトニオ	メッサナを追放された化学者

目次

9かける3番目の王国・外伝

491.

492.

493.

494. 9かける3番目の王国・外伝その1

495.

496. 9かける3番目の王国・外伝その2

497.

498.

499.

500. 9かける3番目の王国・外伝その3

501.

第三十三章のあとがき

back number

奥付

9かける3番目の王国・外伝

491.

すうっとミツハは姿勢を正した。その貌はかつて見せたことがないほど険しい。どうしたのだ、とスクナは目顔で問う。

「メッサナには秘密が……冥界と重なる瞬間があるのです……」

「天の川の暗黒部分のことか？」

「スクナさまをご存知でしたか！」

「むろん。冥界最下層ミクトランを脱出するのに最も頭を絞ったのがそのことだった。ミクトランを出て封鎖されたメッサナに入ったのでは意味がないからな。メッサナと重ならぬよう、ひじょうに綿密な計算が必要であった」

ミツハは黒い目を見開いてスクナを見ていた。

「天の川の暗黒部分の、地上への投影が冥界である。その知識をお持ちの方が同行されていたのですね」

「いかにも」

ミツハはうなづく。

「メッサナは堅牢にして崇高な精神性を持った都市として成長しました。たとえ、重なる瞬間があるにせよ、冥界の影響をいっさい受けない性格を持った都市として。けれども、どうやらそれが崩れたようです」

「……………」

「それははたしてメッサナが衰退に向かっていたからでしょうか？ いいえ。あの都市はまだ成長の途中だった。ようやく成熟しようという時だった。爛熟にも程遠かった。それがなにゆえ崩れたのでしょうか。崩そうという意図を持った何かが浸入したのではないかしら——」

「——ベレオーサ？」

492.

「堅牢にして崇高な精神性を……敵視するとは……いったい何者なの？」

ミツハはかなしげにつぶやく。

「メッサナは黄金郷ごとベレオーサに乗っ取られたと、俺はさる御仁から聞いた。その金貨が証拠だ」

そういうスクナを見つめたあと、ミツハは遠くへまなざしを投げた。

(ベレオーサとやらは、自分が何をしたのかわかっているのだろうか。黄金とは物質化した太陽光線。物質化した太陽の恩恵。物質化した愛と光。それを……踏みにじる……)

そくそくと悪寒が彼女の脚を這い上る。そんな氏族は聞いたこともないと言い放ったミツハだったが、問わずにいられない。ベレオーサとは？ と。

「アンベレオ王国の地方の一豪族だったのだが、王家と婚姻関係を結んだのを機に、急

速に力をつけたらしい。メッサナ攻略の企ては王家が計画したもので、実行役がベレオーサだということのようだ」

スクナは祖父トヨケからの情報をうっそりした口調で披露した。

(アンベレオ王家……)

遠い昔に起こった大災害によってアンベレオ本国と自治領メッサナ市との間に亀裂ができ、海水が入りこみ、王国は分断された。海岸線に近い本国の方が被害は大きく、内陸のメッサナ市はさまざまな分野で多大な支援を行った。そのことによって本国は一命をとりとめたのである。が……

メッサナ市は貧しい親戚にくれてやった土地。本国王家はメッサナ市をそう認識していたから、そんな土地からの支援を快く思わぬ者がいた。生きるか死ぬかという時だったので受け取りはしたが、感謝の念をもっていたわけではなかったのである。以来、本国はがぜん復興に乗り出し、経済大国への道を歩む。ベレオーサ氏とは、王家に底流としてあるメッサナへの感情と、メッサナとは異なる道を行こうとする、その流れに乗ってしまっただけにすぎないのだろう。ミツハのアンテナには今まで引っかかることもなかった存在だからだ。

メッサナではあまり重視されていなかったが、経済それ自体は必要なものではある。(けれど——)、とミツハは考える。アンベレオの経済の根本の動機には不純なものがある。同族であるメッサナへの負の感情。この種の感情は、邪なモノと容易に結びつく。

ミツハは身震いした。

『邪なモノ』はアンベレオ - ベレオーサと重なり合い、彼らが仇敵のごとく目しているメッサナを突き刺したのではないか——

493.

アンベレオ - ベレオーサは『邪なモノ』によって感情を増幅され、感情のままにメッサナを襲ったのではないかしらと、ミツハは思うところを口にした。

彼女の沈鬱な表情に気おされつつ、スクナは尋ねる。「『邪なモノ』とは……ミツハどの」

ミツハの逡巡をスクナは感じ取った。（これは……口にはしてはいけないやつか……）

ミツハは肩にそっと置かれた柔らかい手を感じた。コタエの手。
（この辺一帯、兄と、わたくしと、二重に結界を張ってございます。どうぞ安心してお話しくださいませ。決して外には漏れません。あなたが秘密になさりたいことは、わたくしたちが護ります）

ミツハはなお黙し、囲炉裏に燃える炎を見つめていた。その瞳をさまざまな想いが横切る。コタエとスクナは、息を詰めてじっと待つ。

揺らめく炎が彼女の繊細な面を彩り、やがて、ミツハは瞼を閉じた。金貨を握る手に力がこもっている。

「其は——『邪な炎』。この子の父。冥界の王」

冥界の王——

コタエは息を呑んだ。ケストルを発つ際ヘルガ王女の背後にあったのは、まさにそういった非人間的な感触だったのだ。

冥界の王——

悪意の正体はそれか！

494. 9かける3番目の王国・外伝その1

『9かける3番目の王国』の王さまは、人間の心に温もりの風を吹き込みました。温かな風に吹かれた人間は王さまを愛し、王さまもまた人間を愛し、慈しみました。

*

(魅力的なひとだった。そうでなければ……恋に落ちたりしなかった……)

*

いつのころからか、王さまのようすが、変わってしまいました。まるで人が変わったようでした。

王さまから温もりの熱を受け取った人間のなかに、それを捻じ曲げる者が現れたのです。人間を温めた熱は彼らの心の中で嫉妬の炎へ、憎しみの炎へと変っていきました。消えそうで消えない、熾火。むしろ、不滅の炎となって。

人間を愛していた王さまは、人々の心に起こっていることを知ろうと近づいていきました。近づきすぎたと気づいたときは既に遅かったのでしょう。嫉妬や憎悪の想いはおそろしく強い力で王さまをとらえ、引きずり込み、昏い王座へと据えつけてしまったのです。

王さまは自ら王座に近づきました。もはや、おきさきにはどうすることもできませ

ん。

あげく、王さまはおきさきが身ごもったことに疑いを持ち、いったい誰の子かと邪推
までする始末。深く傷ついたおきさきはついに王さまのもとを去ったのです。

こうして『9かける3番目の王国』は滅び、王さまは邪な世界、冥界の王となりました。
す。

495.

人間の持つ嫉妬や憎悪、負の想念の集合体。それこそが『邪なモノ』なのだと、ミツハはいう。それは強力な磁場を形成し、影響力を振りまき、一大王国を築いた。『彼』は自らその王座に就いたのだ。

「……人間のほうがおそろしいという気がいたします」、とコタエ。「ミツハさま、あなたのご主人は立派に国を治めていらした、立派な方だったのでしょう？ 人間の心に起こっていることを理解しようとまでされていた」

「……そう信じています。『彼』は本当は立派な人なのです。私は今も『彼』のある一面を尊敬しています。別れ際に、『彼』は私が困らないようにと、指輪をくれたのです。とても価値あるものでしたわ」

ミツハはそうつぶやいて、指輪が嵌っていたのだらう指をそっと撫でた。

「とうに、人手に渡ってしまいましたけれども」

指輪はメッサナの礎となったのだ。

それを聞いたスクナは――

「なあ――ミツハさんや――」、と、そろそろとミツハに、顔を向けた。

「その指輪というの……まさか、こがね色と深緑が混じりあったような、かわったやつでは……あるまいな？」

「――なぜそれを――」

「ほんとに！？ そうなのか！？ 見たことがあるのだ！ イリチャヤが持っていた！」

ミツハは口を半開きにして信じられないものを見るように呆然とスクナを見つめた。

「ヘルガ王女からもらったと言ってた。王女は父君から譲り受けた、と。エウメロスの前王はメッサナの芸術家を支援していたそうなの」

「『オリカルクムの指輪』が——巡り巡って——息子の手に——？」

「うむ、俺はミクトランで、冥界の最下層で、それを見たのだ！」

ミツハは改めて金貨に目を落とす。

『彼ら』は出会ってしまったということだ。

496. 9かける3番目の王国・外伝その2

「王子よ」

王さまは呼びかけます。「私はきみの父だ」

けれども、『王子』と呼ばれた少年は首を横に振ります。少年は王子という言葉も父という言葉も知らなかったのです。

「今の今まで、私はきみの存在を知らずにいた。知らなかったのだ。無責任な父と罵ってくれ。幾重にも詫びよう。いや、今さら詫びて済むことでない。しかしきみのその姿かたち、きみが肌身離そうとしないその指輪、それらが物語っている。きみは私が心底愛した女性から生まれたのだと」

少年は眉をしかめます。

「指輪がなにを物語っているって？ この指輪は異国の高貴な姫君からもらったのだ。あなたはなにか勘違いをしている。あるいは、僕を騙そうとしている」

指輪は少年にとってとても大事なものでした。それをくれた美しい姫君の思い出と共に、とても大事なものでした。だから少年は、指輪も、姫君の思い出も、穢されたと思ったのです。

王さまは本当のことを語ったのですが、拒絶されました。心底愛したおきさきを疑ったことも本当でした。そしておきさきの人生も、息子の人生も、もろもろの事柄も、そのうえに築かれた。長い長い年月をかけて。

王さまを見返してくるのは王さま自身と同じ冷たく燃える紅い目。王さまが愛したおきさきの面影。それはすなわち、王さまがしたこと鏡だったのです。

*

この男はいったい何を言っているのだろうと、少年は思いました。赦しを乞うてくるこの男は誰なのだろう、と。

長身で端正な面立ち、立ち居振る舞いや仕草には品、というより、威厳すら漂っているようです。

少年は思い出しました。死神カラスや女ミミズクがこの男の前に這いつくばるようにひれ伏していたことを。あの性悪な二人組が恐れおののいていた。カラスもフクロウも、少年は嫌いでした。彼らを、気持ちいい、と思ったことが一度もありません。不愉快なことだらけ。そんな彼らに恐れられるとはいったいどういうことなのでしょう。

さまざまに頭を絞ったあげく、少年はたどり着きました。この男は、彼らの親玉なのだということに。

497.

おまえの父だ、と名乗る男の手をイリチャは振り払った。男は真実を語り、己の非を認め、イリチャに謝罪したのだが、イリチャには受け入れられる要素がひとつもなかった。

死神ベネトナシュが弄んでいた巨人族繁殖計画を、男は一瞬のうちに握り潰し、巨人族に翻弄された人間を、愚かしい、と評した。

特殊な爆弾を造ったあげくあらゆる生命を汚染した人間は、たしかに愚かしいとしか言いようがない。

だけどさ、とイリチャは混乱する頭を両手で抱える。

それをやったのはネウトラ評議会だろ？　ダーヴェ先生やヒューダーも評議会の人間だからこそ巨人族の痕跡を追って、広大無辺のミクトランを手探りでさまよった。でもなにもかもムダだった！　ほんと、バカみたいだ！　かっこわるいよ！

だけどさ！　それ、愚かしいって言う！？　爆弾は失敗だったかもしれないけど、みんな、頭絞ってやるべきことやったってことじゃないの！？

それを、愚かだって。カラスやフクロウの嘲笑とどこが違う？

ダーヴェたちが這いまわるように探索しても糸口さえつかめなかった問題を、いきなり現れたひとりの男が手を一振りしただけで収めてしまった。イリチャたちが味わったのは安堵感でも達成感でもなく、言い知れない無力感であり、無価値感だった。

超絶の力と神のごとき視点とを持つ男とイリチャとは相容れない地盤に立っていた。

イリチャの拒絶を知っても、なお、男はイリチャを手放さなかった。それは男の、イリチャに対する誠意でもあり謝意でもあったのだが、男はイリチャを「我が後継者にして代理人」と呼んだのだった。

イリチャは男の強大な力に抗するすべもなく、「代理人」として地上へ送られた。

己の渾身の抵抗が単なるつっぱりでしかない。ひよこのように扱われ、己の無力さを付きつけられた。イリチャはそう感じていた。その時。

イリチャはアンベレオ王宮の奥まった部屋であの絵と対面した。いや、実際に目にしたのはのではない。磁力のような不可思議な力が、イリチャの感覚を絵の前へといざなった。その力は『血の縁』というものだったかもしれない。

一人掛けの豪華なソファの白髪の子と其の脇に立つ黒髪の子。秘めやかなろうそくの光の中でも、二人の人物が鮮やかな色と、緻密に、細部に至って描きこまれているのが見て取れる。

白髪の子は、間違いなくあの『男』。女の方は男が『心底愛した』という女だろう。

どちらの人物にも、イリチャは感慨も親しみも覚えなかった。彼はひとりで生きてきた。冷たい水の流りに弄ばれ、温めてくれたのは太陽の光だけだ。

帰りたい、とイリチャは思った。太陽の温もりのようなマミヤ。マミヤの胸に。

*

そしてイリチャの超感覚はアンベレオ王宮内で秘そかに囁かれる話に引きつけられる。

絵の主、この男が、生贄を、人間の生きた血を欲している、と。

498.

余を欲するのは人間である

冥界王は語る

メッサナを欲したのはアンベレオである
大陸全土を制覇する野望を叶える力を、ケストル王家は欲した

余を欲するのは人間であって、逆ではない

人間は余に力を与えんと、自らの血を奉る
そうすることで生血を欲する神として余を性格づける
余が望むわけではない

余を欲するのは人間である

人間の望みを叶えるために余は存在する

499.

スクナとコタエは呆然とした面持ちでミツハを凝視する。

「それがイリチャの父、冥界王の正体。『彼』は火の元素霊として自然のことわりのなかで存在するだけです」

500. 9かける3番目の王国・外伝その3

「王子よ。いかにきみが私を拒否しようと、私たちが親子である事実はかわらない。な
んとなれば、私にはきみの本質が見えるからである。きみは私の後継者であり、代理
人。また、同時に、きみの母の後継者でもあり、代理人でもある。
ゆえに、王子よ、行って、あの新しい領地を治めるがよい。きみこそがかの地の正当な
支配者である」

王さまは人間に金貨を造らせました。その金貨には正当な支配者である者の横顔が刻
まれたのです。

501.

イリチャは嘔吐した。全身、冷水に浸かったように冷たい汗にまみれている。その気持ち悪さといったら、生まれて初めての経験だった。

この気持ちの悪さはいったいなんなのだ。ただひとつはっきりしているのは、『父』だ。

『息子よ、後継者よ、代理人よ』

『私がきみの父だ』

父と名乗るその男は人間の生血を欲するという。

とうてい、受け入れられなかった。まったくその範疇を大きく超えていた。そればかりか、父の遺伝子を持っているということは、父を形作る要素が自分の中に存在するという。今は欲しくもなんともないが、己はいずれ、生きた人の血をすすめるのか——。彼は片手で顔面を覆った。ただ、絶望感によって。

嘔吐しながら、耐えられない、とイリチャは思った。

父なる存在はイリチャにとって束縛であり、支配であり、嫌悪でしかない。もはや、顔をあげる気力すらない。

知っている顔が現れ、旧知の人たちの無事な消息を聞かされても、道は分かたれたという感慨しかわかない。

ミクトランは楽しい場所ではなかったが、体が自由に動いた。己の身体能力がジャガーでさえ追いつけない、人間離れしたものであると知った。心が解き放たれるような高揚を思う存分味わうことができた。それは初めて翼竜に変身したときに味わった解放

感に近かった。全身に力が漲る、あの感覚。

ああ、とイリチャは回想する。ヒューダー。ヒューダーが肯定し、誘導してくれたからだ。そのおかげで力を発揮できたのだ。

再び共に旅をすることなど——ありえない。強大な『父』なる存在に見込まれてしまった以上……イリチャは激しく拒絶しながら、受け入れざるをえないと知っていた。ヘルガ王女からもらった指輪は、肖像画の黒髪の女の指に輝いていたのと同じものだ。間違いない。

こうしていることに、なんの意味があるのだろうか。もうだめだ、と、彼は思った。この世界には耐えられない。父がいようが母がいようが、いや、むしろそれ故に、彼の絶望は底なしだった。

嘔吐がともなう涙を止めどもなく流しながら、もう、だめだ、彼はそう思った。彼は失調しつつあった。

第三十三章 『9かける3番目の王国・外伝』

第三十四章へ続く

第三十三章のあとがき

もしかして、そろそろ佳境なんだろうか。

書いていてなにがしんどいかというと……一度書いたものを読み返してスムーズに読み込めないとき。ストレスを感じる時です。いやですねーこういうとき。自分が読者だったら本閉じますよ。ブラウザの×押すとか。

まあ、しばらく放置してこれだったらダイジョウブかなーという段になってからUPしてます。自分が納得できなくてするリライトは…あんまりやりたくないけど…それほど苦にはなりませんが、ここ、よくわからない、ってとこ、ありそうですねえ。そういうとこって、書いてる本人がよくわかってないからです。はい。

応援ツールからの応援、ありがとうございます。とっても励みになります！！

(↑ 一時設置したのですがうまく表示されなくなってしまい、筆者力不足のため復旧諦めました。使ってくださった皆様にお礼とお詫びを申し上げます。 2024年3月27日)

2024年2月14日 記

back number

第一部

『第一章 世界の果ての島』

はるか昔、ホシナ族の祖先は北方の故郷を出て南を目指した。長い旅の果てにたどり着いた島で、黒曜石の鉱山を得る。しかし、黒曜石の採石、加工、使用、すべて島の『王』の特別な許可によるものだった。

ある日、ホシナ族のもとにふたりの異国人がやって来た。ネウトラ評議会・学術調査団を名乗る彼らの目的は、絶滅危惧種である巨人族の調査だった。

『第二章 破滅の襲来』

調査行の最中に調査団長・ダーヴェとホシナ族の娘・マミヤの行方がわからなくなる。やはり行方不明の巨人と同様、何者かに拉致されたと考えた調査団メンバーのヒューダーとヤスウは島を後にし、ダーヴェたちの痕跡を追う。航行中の彼らは緊急事態信号をとらえ、発信元のエウメロス王国へ急行する。

『第三章 変態』

エウメロス王国を襲った巨人族はどこから来たのか。ヒューダーはエウメロスのレルを伴って隣国ケストル王国へ。両国の国境をなす険しい山脈のふもとに作られていたのは王家の離宮と闘技場。ひとりの少年を密入国させたかどで、ヒューダーは闘技場に引き出される羽目に。決闘の相手は当の少年。この闘技場が巨人族のホームだと直感したヒューダーだったが、己がイリチャ（槍）と名付けた少年に倒されてしまう。

※・サブタイトルについて。

オタマジヤクシがカエルに、イモムシが蝶に形態が変わるという意味での『変態』です。別の意味ではありません

『第四章 レムリアン・ラブソディ』

ケストルの闘技場でマミヤから渡されたダーヴェの眼鏡には、夥しい量の情報が納められていたことがわかる。それは巨人族の遠い祖先の濃密な記録だった。マミヤに眼鏡を託したダーヴェは南へと向かったらしい。世界の果ての島で仕切りなおしたヒューダーたちは、マミヤ、ヘルガ王女、ダーヴェの探索、そして巨人族の襲撃に遭ったネウトラ評議会本部へ向けて、それぞれ旅立つことになる。

第二部

『第五章 メッサナ』

エウメロス王国はヘルガ王女を取り戻すため、帰国したレル、黄金門市のバイスロイと共に動き出す。王女返還の申し入れを受けたケストル王は、王女にかかっていた魔法を解いて求めに応じるが……

一方、ヒューダーはイリチヤを伴ってメッサナ市に入る。メッサナは総督パンテオラが統治する巨大な石造都市にして知と美の殿堂である。ヒューダーの上司ダーヴェはここを訪れ、巨人族の謎を追ってジャガーのバラムと共にすでに立ち去っていた。ヒューダーはバラムの双子の弟バランケに先導させ、ダーヴェの後を追う。

『第六章 脱走巨人』

ヘルガ王女を乗せたエウメロス機はケストル機に襲われる。コタエと駆けつけたイリチヤとによって全員エウメロス領側に助け出されるが、そこには巨人が待っていた。コタエたちに襲いかかろうとする巨人をイリチヤが阻止するが、それはエウメロスの首都へ派遣された増援部隊から脱落した者だった。搭乗機を破壊され、国境付近の険しい高山にとり残されて身動きできない一行はそこで一夜を明かすことになる。そして夜半、レルはコタエに異変が起こっていることに気づく。

『第七章 メッサナからの逃亡』

知と美の殿堂メッサナで音楽家を志し、歌で多くの人々を魅了したメルノ。ある日突然、メルノに心酔していたはずの人々が当のメルノを攻撃し始める。悪意に満ちた激しい攻撃を見かねた人々は彼女を助けようと進んで支援するが、メッサナ郊外でメルノはひとり放置されてしまう。後戻りもできず湿地帯へと踏み込んだメルノは、幻を見、神と名乗る者と言葉を交わす。同じころ、ヤスウはネウトラ評議会本部を発ってメッサナを目指していた。

『第八章 IRITIYA』

人々に多大な影響を及ぼす力を秘めた芸術家を見出し、恐怖の中に放逐する。冥界の王が白羽の矢を立てたのが音楽家メルノだった。王は部下のベネトナシュを使ってメルノとメッサナの人々を恐怖に陥れようと画策していたのだった。メルノは死んだと報告するベネトナシュ。だが冥界の王はひそかにそれを疑う。

一方、イリチヤとマミヤとは、エウメロスの首都へ向かうレルらと別れ、メッサナ市を目指す。が、メッサナ総督府には異変が起こっていた。イリチヤは外部の隠れ家に潜んでいたコモラを探し出し、パンテオラ総督がアンベレオ本国の兵士に連れ去られたことを知る。

『第九章 原子の火』

のちの世に黄金郷と呼ばれるものを、メッサナ市は持っていた。総督家の本家筋にあたるアンベレオ王家は、拘束したパンテオラの身柄と金脈とを引き換えにしようと画策を始める。パンテオラの代理を務めることになったパルダリス氏は本家の要求に激怒、そんな中、ネウトラ評議会がメッサナが抱える化学者の協力を要請してきた。評議会は巨人族侵攻対策のために原子炉を造ろうとしている。メッサナの化学者の長メンドルプは、それを知って震撼する。

2011年の原発事故を踏まえた『火精霊に聴く -原子の火に関する一問一答-』を収録しました。

『第十章 二極世界』

死神はメッサナの金脈がアンベレオの手に渡ることを好まない。その思惑は、アンベレオ王家とメッサナ総督家との全面的対立へと向かわせる。それは多くの物資をアンベレオ王国に依存する諸国と、知と美をメッサナから持ち帰った各国の人材たちとの対立へと発展する様相を見せていた。また、メッサナ化学者集団は巨人族対応を巡ってネウトラ評議会と対立する。

ヒューダーの要請に応じるイリチヤの旅立ちをひとりで見送るヤスウ。並外れた知と美の都の凋落が、ヤスウの目の前で始まろうとしていた。

第三部

『第十一章 天津甕星』

黒曜石に携わる人々・ホシナ族は原住民の民ではない。若い兵士アマセオは、昔、星に導かれてやってきたというホシナ族に親しみと興味を覚える。

ホシナ族と交わるうちに美しい青緑色の幻獣を見かけ、ますますホシナの地に惹かれるアマセオだった。

そんな中、アマセオの実家の使者がやってくる。使者が持ってきた知らせは、アマセオの妻に子どもが生まれたというものだった。族長夫人のオマキは大喜びするが、アマセオは激しく動揺する。生まれた子は三つ子。アマセオ自身も三つ子だった。それは生まれてはならない者だったからだ。

『第十二章 機織り族の野望』

王に献上された見事な織物。かつて王の正后に贈られた腹帯と同じ材質のものに見えたオモイカネは、それに触れたとたん、激的な反応を体験する。現政権の日読みを司る彼は、王に危害が及ぶ懸念からその織物を預かる。

一方、赤子と妻に会うため、帰郷したアマセオ。故郷は鳥を守護神とする神聖な織物の郷。妻の兄、タマシギと語り合ううち、タマシギが一族の持つ織物の権利の維持と織物の技術開発に並々ならぬ意欲を持っていることを知る。家を追い出され、家業に興味のないアマセオだったが、タマシギに対して違和感を覚える。そんななか、アマセオの子が怪鳥にさらわれる事件が起きた。

『第十三章 アマセオとカガセオ』

鳥の化け物がシトリを襲い、三つ子を連れ去った。三つ子の父親・アマセオは化け物を追う。シトリ一門の将来について、追放同然とはいえ嫡男であるアマセオと考えが食い違うことに気づいたタマシギは、この事実を即刻政庁に報告する。

報告を受けたフツヌシは、アマセオがかねてよりホシナ族と接近していることを懸念していた。

この国の仕組みは北極星を中心としている。一方、はるか過去に石器と狩りの技法と共に北からやって来たホシナ族は金星に導かれていたからだ。しかしこの国にとってホシナ族はなくてはならない存在であることがフツヌシを悩ませる。

アマセオの子をさらったのは、出生後に殺されたはずのアマセオの弟だった。弟はシトリの後継者であるアマセオの力になるべく、殺された後タマシギに憑依し、シトリを導いてきたことを告白する。ところが、タマシギの目的のためには手段を問わない強固な性格は、得体の知れないモノを深淵から呼び込んでしまった――

『第十四章 ヤサカオ 立つ』

ホシナ族の黒曜石事業拡大は政府から仕掛けられた罠だった。権利の拡大解釈を理由に、政権の軍部を司るフツヌシはホシナ族を討つべく行動を開始する。フツヌシはまた、アマセオを陥れる訴えをもタマシギから受けていた。

夜陰に紛れてホシナ族の地を訪問したスクナは、アマセオにすぐにこの地を離れるよう進言する。フツヌシの狙いを攪乱するためだった。そしてスクナは、タマシギに憑依したカラスの正体を知る。ミツハの中のメルノは言う。それは死神だと。

死神の登場に動揺したメルノはホシナ族を抜けようとするが、スクナから厳しい叱責を受けるのだった。

一方、アマセオと懇意の仲のヤサカオは、ひとつ問題を抱えていた。ホシナ族を存続の危機に陥れ、ホシナの娘マミヤ失踪のもととなった事件を起こしたゴンがヤサカオの息子だった。族長ホシナがゴンをホシナ族の者として扱ったため、ヤサカオの名は表沙汰にならなかったのだ。そのことを恩義と受け取ったヤサカオは、ホシナ族にかわってフツヌシを迎え撃つ。

『第十五章 ふたつの北極星』

かつて名を奪われ、取り上げられたわが子が意外にも近くにいると知ったミツハは彼女本来の力を取り戻し、カラス-死神と対決する決意を固める。

一方、フツヌシの軍団のひとつが農村を襲って村人を人質にホシナ族に投降を迫り、ホシナの郷をも襲おうと謀る。ホシナ族はもはや退路は断たれたと知り、そのやり方にアマセオは失望と怒りを覚え、フツヌシ、オモイカネに政府の真意を問いただす。

オモイカネは、現王の後継者を巡って政府内で陰謀が渦巻いていることを語る。王と深い関係にあるホシナ族は陰謀の犠牲になり、ヤサカオ族と共にフツヌシを負かしたアマセオは王位を巡る者にとって脅威的な存在になっていたのだった。

はたして、ホシナ族とアマセオの行方は。

第四部

『第十六章 トゥランの七つの洞窟』

冥界王に無断で世界の果ての島に手を出した死神は冥界王の怒りを買い、ついに見放される。

一方、ケストルの追撃を逃れた王女ヘルガはついに故国に帰還。信用のおける側近らと情報を交わすうち、ネウトラ評議会が巨人族の襲撃を受けて壊滅状態であること、また、メッサナ市に異変が起こり、封鎖されたことがわかる。そんななか、エウメロスの地下シェルターに逃れてきた黄金門市の皇帝は、エウメロスの生存者全員を地下シェルターに収容し、ひとつしかない入り口を塞ぐことを提案する。大陸の下には遠い過去に造られた巨大な都市があり、エウメロスの地下シェルターはその都市から伸びた枝道のひとつだった。皇帝の一族は驚異的な力をふるって地下道掘削に取りかかる。

『第十七章 ブルー・マーキュリー遭難』

巨人族を殲滅させるべく原子炉製造に意欲を燃やすティコ博士に頼もしい協力者が現れた。評議会西支部のコパーン博士である。メッサナ化学者団と決裂してしまったティコは、コパーンの進言を取り入れ、原子炉から原子爆弾へと舵を切っていく。その様子を耳にした黄金門の皇帝は、評議会には専門家がないのだと見抜く。いずれにしても地下へ潜ってしまったエウメロスには無関係なことだと思われた。ところが事態は急変する。コパーンがティコへ送った無人偵察機が行方不明になった。偵察機は爆弾の製造仕上げに使うブルー・マーキュリーという素材を掲載したまま、ケストル北方、氷河地帯でコントロール不能になったのである。ケストル王国が遠い昔、氷河の決壊によって洗い流された原野に建設されたことを知ったヘルガはケストルに留まっているバイスロイ救出に動き出す。

『第十八章 王女の冒険』

ケストル王国に向かったスクナとヘルガは、途中、アマセオと出会う。彼はホシナ族と行動を共にしてきたが、ホシナ族が安全な場所で逗留中、単独行動をしていたのだった。スクナらが大任を負っているのを知り、アマセオはケストル北方へと偵察にむかう。

ケストル王パウルと対峙し、国民らに避難を呼びかけたヘルガはバイスロイが王都にいないことを知る。彼は離宮へ招待されていたのだった。ヘルガにはおぞましい記憶の残る場所だったが、バイスロイ救出に急行する。しかし王都よりずっと北にある離宮は決壊した氷河に吞まれようとしていた。

『第十九章 ミクトランへの道』

ケストル闘技場からエウメロス地下シェルターへ移されたアマセオ。レル・ヴァリスは彼自身が保管していた闘技場の見取り図とアマセオが持ってきた情報が一致していること、そしてかつてダーヴェのメガネを解析したコタエの記憶から、ケストル闘技場には巨人族が出入りしていた機構があることに気づく。一方、破壊されつつある闘技場地下にある渦に飛び込んだバイスロイらはどこにも知れぬ場所に到達。バイスロイは到達地の特徴から、それが太古に失われた転送システムであると知る。

第五部

『第二十章 冥界の巨人』

バイスロイ一行を出迎えたのは、ネウトラ評議会のダーヴェ。ダーヴェはケストル闘技場から転送システムを使ってミクトランへ来たのだった。同じ方法で多くのケストル人がミクトランにやって来ていた。いくつもの事情で母国へ帰れなくなったケストル人は、ダーヴェらをつけ狙った。彼らは、転送システムのパスの機能をもつ『評議会の身分証』をもたらしした人間、ヒューダーをも恨んでいたのである。地上帰還の可能性がきわめて低いなか、ダーヴェたちは最大の謎、巨人族がどこからやってくるのかを解こうとしていた。

『第二十一章 メッサナの黄金郷』

ヒューダーとスクナとはホシナの郷について、イリチャについて情報を交換し合う。スクナはその見た目からメッサナからの逃亡者メルノはイリチャの身内ではないかと考えていた。しかしヒューダーは納得できない。メッサナ人とイリチャとでは外見の特徴が違い過ぎるからだ。

かつてメルノは、その名の者は死んだとし、偽名として自らミツハと名乗った。そのことを知ったヒューダーは、『ミツハ』とは水の精霊を表す音であると気がつく。古い伝説によればイリチャの母親は水の精霊である。

一方、メッサナ滞在中のヤスウとマミヤは総督代理パルダリスのもとに身を寄せていた。そこへメッサナの王家アンベレオの王、行幸の通達が届く。それは国王の行幸完了まで現在メッサナ市にいる者はその場を動いてはならないという命令でもあった。

『第二十二章 物質化した太陽光線』

黄金の力とは世界を清浄し、活性化させるもの。その働きは太陽と同質である。誰もが受け取ることのできる太陽光線と同様に、人は誰も黄金を受け取り、その浄化と活性化エネルギーによってより偉大な存在へと上昇する……

しかし黄金時代を象徴するメッサナ市は、音楽生迫害事件をきっかけに内側から崩れ、メッサナ市の

本家アンベレオ王国の植民地では黄金が高騰を始めた。
いまだ対処の手がかりもつかめない巨人族問題と相まって、世界は混迷を深める。

『第二十三章 ミクトラン脱出』

ケストル人ソルドらがミクトランを去った。時と場所を選ばなければ脱出は可能なのだが、ただ、計り知れない危険を意味していた。そのために、スクナの脱出計画をダーヴェは強硬に反対する。しかしヒューダーは絶対に安全な道などないと言い、反対するダーヴェを牽制する。そしてスクナともう一名の枠に、バイスロイはヘルガを推す。彼はメッサナの音楽生迫害事件の被害者たちはかつて親交を結んだ者たちだと知り、物理的にメッサナに最も近い場所であるミクトランに残ることを選んだのだった。

ミクトランの怪物の群れが大挙して押し寄せるなかを、スクナとヘルガは脱出を決行する。

『第二十四章 トーラの鷲の園』

ヘルガはアマノカガセオによって大陸中南部の森林地帯へといざなわれる。陸上からはとうていどり着けない険しい地形のなかに現れた湖に浮かぶ島・トーラで、ヘルガは去る大災害の直前にケストル宮廷から退避したはずの家臣たちと再会する。そこは掘削中の地下道がいずれ到達する地、出口でもあった。

一方、ミクトランに残った一行の巨人族探索は遅々として進まず、仮面の怪物の執拗な攻撃に手を焼いていた。怪物群の攻撃を一手に引き受けているイリチャに、戦いを宿命づけたかのような名づけをしたことにヒューダーは責任を感じていた。

『第二十五章 イリチャの行方』

ヘルガからの贈り物である指輪を追ったイリチャは死神ベネトナシュの手に落ちた。しかし、ミクトランの主・テクトリが横取りする。わけもわからず嘲弄されるイリチャだが、巨人族が造られる現場をついに目にする。そこはミクトランの中に作られた異次元空間で、製作者はメッサナを追放された化学者プラトニオ。評議会の爆弾が巨人族を殲滅すると同時に地上のあらゆるものを汚染したことがわかると、テクトリもプラトニオも慄く。評議会の爆弾とは、メッサナが封印していたきわめて危険なものだったのだ。そんな彼らの前に現れた男が巨人族製造を弾劾したことによって巨人族問題は集結しそうにみえたが、地上を汚染したのが地上の人間であると知ったイリチャは激しく落胆する。

第六部

『ジャガー狩り』

ミクトランで行われていた巨人族製造はある人物の一声で打ち切られた。ミクトランは冥界から切り離され、ダーヴェたち三名はイリチャの懇願により地上のメッサナへと送られた。巨人族の危機が無くなり、ミクトランを脱出できたことよりも、その急転直下の転換ぶりに三名は戸惑う。なによりイリチャが謎の人物に連れ去られてしまった。彼らは敗北感と無力感とに苛まれる。

メッサナの前の提督パンテオラを飼い主としていたジャガーのバラムとバラケもあるじを失った現実と直面し、失調し始める。そんな折、メッサナ中のジャガーがすべて集められ、くにが管理するという通達が発表された。

『第二十七章 仮面の神』

黄金門の後継者バイスロイは身分を隠したままメッサナの街中に出、メルノの生家跡でアンベレオの女先遣隊長シパドと出会う。バイスロイが彫刻を得意とする芸術家だという話を真に受けたシパドは、彼に記念硬貨を造らせるため、アンベレオ王都へと送る。ヒューダーたちは出かけたまま戻らないバイスロイを心配するが…

メッサナ市奪還に湧き返る王都だったが、王場内には緊張が走っていた。アンベレオが信奉する神が、その代理人を送り込んできたのだ。そして記念硬貨に彫られるべき人物は、国王から神の代理人へと変更になった。

バイスロイはモデルである神の代理人と対面する。

『第二十八章 9かける3番目の王国』

メッサナ市奪還記念硬貨に刻まれる人物とはイリチャだった。かつてメルノが歌った歌を耳にして動揺するイリチャだったが、かえってバイスロイに対して心を閉ざしてしまう。

モデルのデッサンを携えてメッサナに戻ったバイスロイは、女先遣隊長シパドが新たな総督として就任することを知る。シパドは本来彼女のベレオーサ家のものだった土地を取り返し、治めることを当然と考えていた。そして二日後の就任式の折り、バイスロイに夫として、隣に立つよう求めるのだった。

古い昔話『9かける3番目の王国物語』には王と別れた后が特徴のある指輪を持っていたことが描かれている。それと同一と思われる指輪を持って現れたイリチャ。彼が金貨に刻まれたことはいったい何を意味するのか。

第二十九章 ベレオーサ市の惨劇』

新総督就任の日、シパドはおそろしいことを企んでいた。衆目のなか、巨人族にケストル人ソルドらを襲わせたのだ。バイスロイに求婚を断られた腹いせだった。新総督お披露目を見物にきた市民たちはシパドの残虐な性格を知り、眼前で繰り広げられた惨劇に恐怖に慄く。ダーヴェェやヒューダーの衝撃はさらに大きい。ソルドたちを襲った巨人に見覚えがあった。

アンベレオは巨人族を商売に利用できると考えていた。それがアンベレオの思惑だったのだ。

しかし総督就任の儀式を血で汚したことは本国の怒りを買い、シパドは呼び出しを受けアンベレオへ向かう。王家から厳しい叱責を受けたシパドの兄・ドゥルは妹に激怒し、同行してきたバイスロイを深夜の王都へ放り出してしまふ。

『第三十章 金星の巫女』

旧メッサナ市の住民は新総督就任の日に見せつけられた恐ろしい光景に深く傷つき、新総督への反感を持ってないほど委縮してしまった。そんななか、マミヤは金星神への祈りを捧げるために神殿へ向かった。

同じころ、バイスロイが身に着けていた黒曜石の短剣が金星神に関わるものと知ったシパドは仕返しを企む。

一方、世界中に広がるネウトラ評議会加盟国は、ネウトラ・ポリス消失と評議会職員の安否の説明を求め、世界に向けて声明を発した。アンベレオはその声明を盾に、新ベレオーサ市滞在中の評議会全員の出頭を求めた。ポリス消失の経緯を知るダーヴェェとヒューダーは出頭要請に応じようとするが……

金星神の神殿に詣でていた者全員が当局に捕らわれるという事態が起きた。それはさらなるバイスロイへの意趣返しを企むシパドの仕業。神殿にいたマミヤはその網にかかってしまふ

『第三十一章 ボムソワールの劇場』

シパドのバイスロイに対する執着は、彼に黒曜石の短刀を与えたというマミヤへの激しい嫉妬を産んだ。そのことにマミヤはただただ困惑し、あらためてヒューダーへの想いを確かなものにする。シパドはマミヤへの意趣返しを思いつく。バイスロイを初めて見たボムソワール家の焼け跡、そこに隣接する野外劇場を使って、衆目の中、マミヤを辱めようという。そしてマミヤを襲うのは旧メッサナ市民から取り上げた、彼らの友人、ジャガー。ジャガーの集団のなかにバラムを見出したマミヤは彼に手を差し延べ、両者は心をかよわせる。

第七部

『第三十二章 悪意の正体』

アマセオによって桃源郷にいざなわれたスクナを待っていたのは祖父のトヨケ。祖父から黒ジャガーの毛皮とベレオーサの金貨を見せられたスクナはメッサナで尋常ならざる事態が起こっていることを知る。祖父は金貨に刻まれている人物はミツハだというのだが……

スクナは世界の果ての島へ飛び返り、ミツハに金貨を突き付ける。メッサナと自分の関係は遠い過去のものだと語るミツハ。しかしミツハと重なって存在するメルノにとっては過去とは言い切れない。メッサナで被ったおぞましくも生々しい記憶に襲われたミツハ-メルノは激しく混乱し、助けようとしたスクナをも巻き込もうとする。パニックに陥ったスクナは助けを叫ぶ。それに応じたのは彼の妹、コタエだった。

奥付

Salamander in the circle

第三十三章 9かける3番目の王国・外伝

2024年2月20日 初版発行

著者 峯村 明 [E-mail](#) blog [D & R](#)

表紙素材 [「月とサカナ」](#)

制作 Puboo

発行所 デザインエッグ株式会社
